



Title	1950年代日本における武装中立論：辻政信の言論活動にみる〈反米〉と〈親中〉の交錯
Author(s)	盧, 思雅
Citation	グローバル人文学研究交流会要旨集. 2025, 1, p. 82-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1950年代日本における武装中立論

—辻政信の言論活動にみる〈反米〉と〈親中〉の交錯—

盧思雅（日本学・M1）

1. はじめに

敗戦後、日本は、占領下での民主化改革を経て、独立を遂げる過程で、意識的にも無意識的にも〈親米〉の価値観を内在化させた。戦後日本の保守本流は、吉田茂に代表されるように、日米安全保障条約を前提として、〈親米〉の立場に立ってきた。ただし、冷戦下の日本の保守派の中には、国民的自尊心と対米依存の現実的なニーズとの矛盾の克服を課題として行動する人びともいた。そうした〈反米〉の立場を前景化させた保守派の中でも特徴的な存在として、旧日本軍参謀であり戦後には右派の国会議員を務めた辻政信（1902～？）を挙げることができる。

辻政信は、旧日本陸軍の参謀としてノモンハン事件やシングポール攻略戦を指揮し、多くの死者をだしたが、敗戦後には東南アジアや中国大陆などで地下に潜行することにより、戦犯としての訴追を免れた。そして、1950年代には右派の論者として多くの著述を行うとともに、故郷の石川県から出馬し国会議員として政界入りを果たした。このように戦後の日本社会において復権を遂げた辻は、〈反米〉の立場に立つ保守派内の少数派であると同時に、〈親中〉の立場にも立っていたという点で、特徴的である。

本発表では、彼の武装中立論の独自性に着目することで、彼において日本の安全保障と〈反米〉の立場はいかに両立していたのか、彼は〈反米〉をいかに実践したのか、さらには、彼において〈反米〉と〈親中〉はいかに交錯していたのかを明らかにする。少数派としての〈反米〉保守の立場に、中国との関係にも留意しつつ光をあてることが、本発表の目的である。

2. 辻政信の武装中立論の独自性—辻の著述の分析を通して—

ここでは、1950年代の冷戦構造を前提として辻が提案した武装中立論を紹介・分析する。

辻は、1952年4月に、『自衛中立』を出版した。この本の中で、辻は、軍人時代に収集した情報に基づいてソ連の戦力を分析し、米軍の工業生産額はソ連を上回るが、ソ連の国土は広大であるため実際に開戦した場合どちらが優勢になるかはわからないとしている。辻は、近い将来に第三次世界大戦が起こる可能性が高いと考えており、日本はそれに備えて武装中立を行わなければならないと主張していた。

辻は、ソ連が日本を虎視眈々と狙っており、いつでも上陸してくる可能性があると考えていた。また、辻は、ソ連が朝鮮労働党、日本共産党、中国共産党を扇動し、日本本土で〈赤い暴動〉を起こすことを懸念していた。辻は、このような懸念に基づいて、再軍備を主張していた。

辻は、日本の軍備のあり方に関し、「民兵体制」を基盤とする独自の構想を提唱した。彼の提案は、自衛と生産の両立を目的としており、北海道にはソ連の上陸を防ぐため近代的な軍隊を配置する必要があるが、それ以外の地域においては200～300人程度の小規模な常設部隊を配置するにとどめ、農民を農閑期に民兵として訓練すればよいと主張していた。彼によると、これにより、常備軍を維持するための膨大な軍事費を削減しつつ、生産活動を維持することが可能となる。

辻は、日本は以上のようななかたちで武装したうえで、米ソの対立のなかで中立を保つべきであるとした。辻から見れば、アメリカの占領は、「パンパン」などの社会問題を生じさせ日本の社会秩序を乱すものであったし、親米の立場をとると日本がアメリカの戦争に巻き込まれる可能性が高まると考えていた。ロシアが津軽海峡以北を切り離して日本を分断し北海道に人民政府を作り、日本が「第二の朝鮮」のような状況に陥るといった事態を避けるため、日本は米ソ両陣営の外に位置する「第三の道」をとるべきであると提唱した。このような立場に立つ辻は、衆議院議員に当選した1952年の選挙の際の主張をまとめた著書『私の選挙戦』（1953: 65: 67）において、「自衛中立」「食糧自給」「電源開発」「アジアの経済提携を結べ」といったスローガンを掲げて、武装した日本が、アメリカから自立して、米ソの間に立ちつつ、アジアに

接近することを説いている。

3. 反米政治家としての言論活動—内灘闘争への関与に注目して—

辻は、選挙期間中の講演会において、繰り返し、アメリカへの警戒と日本の独立を唱えた。この主張は、当選後の政治活動において実践された。その象徴的な出来事が、1953年の内灘闘争への参加である。

1950年7月に国連軍の名の下に朝鮮戦争に介入したアメリカは、戦争遂行の一環として石川県内灘村に試射場を設置することを1952年末に決定した。しかし、この計画は地元村民の激しい反対を引き起こした。村長の中山又次郎を中心とした陳情団は試射場計画を中止させるため、たびたび東京へ赴き政府との交渉を行なった。この闘争は戦後日本における反米運動の象徴的な一つとなり、当時大きな影響を与えた。

当時、辻は、1952年10月に行われた第25回衆議院選挙において、石川一区でトップ当選を果たしていた。中山村長は村民を代表して辻を訪問し、事態を訴えた。村民の立場に共感した辻は、政府・アメリカ・村民の間で調停を始めた。

1953年4月、試射場問題が白熱するなか、第26回衆議院選挙の投票日には、辻は内灘村を訪れ、村民に支持を表明し、トップ当選した。6月14日、試射開始が迫るなか、村民は試射場付近に集まり抗議活動を行なった。同日午後6時、辻は現場を訪れ、米軍と交渉を試みたが失敗し、村民とともに座り込みを行なった。翌日、試射が開始されると、辻は現場を離れ東京へ戻り、岡崎外相の秘書に連絡を取って、アメリカ大使館を訪れたが、いずれの訴えも無視された。

辻は、この年、『文藝春秋』に寄稿して、この件を批判している。辻の立場からすると、アメリカを支持する日本政府も、反米を煽る共産党も、そしてアジアに介入してその運命を左右しようとするアメリカも、いずれも間違っていた。辻は、戦後日本の一般的な保守政治家と同じように反共の立場をとる一方で、アメリカに対する警戒心と批判も抱いていたのである。

4. 〈親中〉構想の模索—辻政信におけるアジア連携の実践

戦時の辻は、石原莞爾の思想的影響を受け、東亜連盟運動にも参加していた戦後の辻は、その経験を踏まえつつ、反米の立場から、アジア連携を唱えた。その際に最も重要視されたのは、中国との関係であった。

1936年から関東軍の作戦参謀に就任していた辻は、東京の参謀本部にいた石原莞爾を訪ね、東亜連盟の思想はじめて触れた。石原は、辻に向かって、日本は満州に対する優越感を捨て、日満は完全に対等な立場で道義国家を建設すべきであると主張した。この主張は、辻の目を開かせ、辻は石原を「先覚の導師」(1950b: 75)として崇敬することになった。堀(1993)によれば、1940年2月、辻は南京に赴き、旧識の板垣征四郎に協力して東亜連盟運動を推進し、汪兆銘政権の強化を進めた。このように、戦時下の辻と石原は、東亜連盟の重要性を理解する同志であった。この両者の精神的な結びつきが、敗戦後には大きく変化する。

辻らは、日本が独立を回復した直後の1952年7月に、東亜連盟同志会を結成した。綱領には「自衛中立、政治独立、経済自立、アジア解放」を掲げた(1993: 17)。さらに辻は、1953年にはこの同志会から脱退し、自衛同盟を結成し、独自の武装論を展開していく。軍人出身で好戦的な辻は、戦後の石原の再軍備反対論を理解できず、東亜連盟運動の後継者たちと袂を分かつことになったのである。

冷戦構造下でアメリカが日本を「従順なる第二の満州」(1953: 158)にしてしまおうとしているという危機感を持つ辻は、西側陣営にも東側陣営にも属することのない、「中立」という立場を日本に求めた。そして、〈反米〉の立場を模索する辻は、中国などのアジア諸国との連携によって日本の「中立」が実現されると考えた。このため、国会議員当選後の辻は、中日両国の国交回復のため、積極的に奔走することになる。

1955年9月、辻は北村徳太郎訪問団とともに、ソ連および中国を訪問した。城山(2013)によれば、9月29日、訪問団は中国の周恩来首相が主催した晩餐会に出席した。ここでの会談をきっかけとして、中国政府は辻について「元軍人の内で一定の勢力を有している」と評価した。その後、毛沢東の意向を受けて、中央外連部副部長の廖承志らは旧日本軍人の訪中を積極的に推進し、辻と何回も電報のやりとりをした。辻は1957年にも再び中国を訪問している。

辻の主張は、石原莞爾からの思想的影響を受けているだけでなく、現実に基づいてもいた。戦後初期の国民党統治下の混乱した社会状況を目の当たりにし、国民政府の一職員として国共内戦を経験した辻は、『潜行三千里』のなかで国民政府の失政を批判するとともに、敵対する毛沢東の統治に好意を示してもいる。訪ソ・訪中を終えて帰国した後に出版された記録『中ソひとり歩き』(1955)でも、辻は、ソ連には警戒感を抱いているが、中国政府のことはしばしば称賛してい

る。

当時、辻は、中国はソ連陣営以外の国から承認を得る必要に迫られていると考えており、中国にとって隣国日本との関係改善は重要であるとも考えていた辻は、そういう考え方立脚して、帰国後には、中日民間交流を積極的に推進していく。辻(1955)は、中国が日本が中ソ反米の陣営に加わることを望んでいることを当然認識してはいるが、そのことを踏まえたうえであえて彼は、ソ連を排除したかたちでの日中の連帯を目指そうとしている。

5. おわりに

以上、本発表では、1950年代に国会議員として政界に入り、冷戦下で日本の武装中立を主張した辻政信という特徴的な人物に即して、日本の自主独立を図る〈反米〉保守思想がいかに形成・展開され、それが〈親中〉の立場といいかに結びついていったかを明らかにした

今後の課題は、戦後日本における〈反米〉言説の展開を、〈親中〉との関係に留意しながら、構造的に捉えることである。堀幸雄(1993:29)は、戦後右翼は「一人一党」という特徴を持っていると指摘しているが、そのような戦後右翼を構造的・総体的に捉えるうえで、本発表の視座は有効であろう今後は、辻政信の事例を出発点としながら、複数の保守論者の比較検討に進み、戦後日本の保守思想における〈反米〉言説の展開をそのアジア認識・中国認識にも留意しつつ明らかにする作業に取り組んでいきたい。

参考文献

- 堀幸雄(1993). 『戦後の右翼勢力』勁草書房.
北陸政治経済研究所(編)(1953). 『内灘—真実の記録』勁草書房.
前田啓介(2021). 『辻政信の真実：失踪60年—伝説の作戦参謀の謎を追う』小学館.
城山英巳(2013). 『元軍人訪中団と毛沢東外交の戦略性—中国外港档案から見る軍国主義の清算』『ソシオサイエンス』19号、早稲田大学先端社会科学研究所.
神田正雄(1953)『日本の縮図 内灘—軍事基地反対闘争の実態』社会書房.
鈴村裕輔(2022). 「自民党石橋派の盛衰：石橋湛山と辻政信の関係を踏まえつつ」, 『国際日本学』vol. 19, pp. 61–71, 法政大学国際日本学研究所.
辻政信(1950a). 『潜行三千里』亜東書房.
辻政信(1950b). 『アジア共感：戦いを通じて見た中国』亜東書房.
辻政信(1952). 『自衛中立』亜東書房.
辻政信(1953a). 『この日本を』協同出版.
辻政信(1953b). 『私の選挙戦』亜東書房.
辻政信(1953c). 「内灘の砲弾の下で」『文芸春秋』31(12), pp. 45–53, 文芸春秋社.
辻政信(1955). 『中ソひとり歩き』河出書房. 辻政信(1961). 『中立の条件』錦正社.
吉見俊哉(2007). 『親米と反米—戦後日本の政治的無意識』岩波書店.